

イエスの生涯において、四福音書全てに記されている場面はごくわずかです（「受難週」に関する共通の詳細な記述を除く）。正確には、イエスの洗礼と五千人の食事の二つだけです。

イエスの言葉や働きが三つの共観福音書すべてに登場する場合、それはその重要性を示しています。それは、三人の著者全員がその情報が読者にとって最も価値があると判断したことを意味します。

変容は、共観福音書三部作すべてに収められている特別な場面の一つです。しかし、このエピソードにはもう一つ、稀有な特徴があります。それは、使徒が手紙の一つ、正確にはペトロの手紙二の中で具体的に言及していることです。新約聖書の四つの箇所に記載されていることから、変容はイエスの生涯で最も強調されている出来事の一つです。

さらに、これは新約聖書の歴史において、父なる神が聞こえる声で語られたわずか3回のうちの一つでもあります。これらすべての要素が、この経験をイエスの真に稀有で重要な啓示の一つにしているのです。私たち弟子は、この物語のメッセージに十分に注意を払う必要があります。

この出来事は、私たちがこれまで経験したことのないものです。どんなに想像力豊かなSF映画でも到底及ばない、背筋が凍るような物語です。福音書にこのような一節があると、現代の懐疑論者はこう言います。この「超自然現象は、明らかに作り話の寄せ集めだ」

福音書の記述の信憑性に対するこのような攻撃は、今に始まったことではありません。使徒たちの宣教活動中にも、まさに同じ反論が提起されました。そこで、目撃証人としてそこにいたと主張するペテロは、次のように記しました。

（ 16 ） 「 わたしたちは、主イエス・キリストの力と来臨とをあなた方に知らせた時、巧みに考え出された物語など信じませんでした。しかし、私たちは彼の威厳を目撃したのです。

(17) 父なる神から誉れと栄光を受けたとき、栄光の威光は、イエスにこう告げられた。 」これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。 」

(18) そして、私たちは天からこの言葉を聞いたのです 聖なる山で主と共にいたときのことです。 ペトロの手紙二 1.16-18

いいえ、変容は巧妙に仕組まれた物語ではありません。四福音書の内容はどれも作り話ではありません。考えてみてください。もしこれらが人間が作った物語なら、世界中の文学作品の中にイエスのような物語や人物がたくさんいるはずです。しかし、そんなものは存在しません。イエスと福音書は、まさに唯一無二の驚異なのです。

さらに、もしペテロが今日この地上に生きていて、同じ物語をまだ宣べ伝えていたら、彼は真っ先にこう言うでしょう。

」私を見てください。もちろん、私はアインシュタインなんかじゃないんです！ただの労働者階級の男で、たまたま神に愛され、神の御子を知る機会に選ばれたんです。私は感情を隠さないタイプです。一貫性がないのが私の最大の欠点です。でも、数日私と一緒に過ごしてみれば、二つのことが分かるはずです。

まず第一に、私が変容のような物語をでっち上げるほど頭が良いはずはありません。イエスは私のDNAにそのような天才性を組み込んでおられません。第二に、私は嘘つきではありません。ありのままを語ります。私を知っている人なら誰でも私の言葉を信じることができます。二枚舌でガリラヤ湖で漁業を営むことはできません。誰も嘘つきと取引をしません。

いいえ、私がこの報告を思いついたのは、まさに今この瞬間に起こった出来事からです。そうでなければ、自分がいかに愚かだったかを全世界に知らしめ、天の父からおまけの叱責を受けるような話をする理由がありません。

一件落着。

「祈り」というテーマを特に強調した福音記者です。変容が祈りによって起こったと語るのは、ルカの福音書だけです。イエスが山に登ったのは、変容を体験するためではなく、祈るためでした。

イエスが祈りを続けておられると（イエスは毎日何時間も祈りを捧げるのが常でした）、イエスの容貌は栄光に満ちて変わり、「顔は太陽のように輝いていた」（マタイ17:2）とあります。言い換えれば、まぶしすぎて見るのができなかったのです！このきらめく光はイエスの衣を照らし、衣を「この世のどんな洗濯屋も漂白できないほど真っ白に」しました（マルコ9:3）。ルカは、その白さは稲妻のようだったと述べています。もしあなたがその一瞬の閃光を捉え、電球のように輝き続けることができたなら、と。

山の麓の人々が、山腹に太陽のように輝く小さな光の点を見上げたとき、何が起きていると思ったのか、想像するだけでも不思議です。

イエス「の変容」は、天の神性を特徴づける栄光の状態への、一時的かつ限定的な復帰を告げるものでした。パウロは、父なる神が「近づきがたい光の中に住まれ、誰も見たことがなく、また見ることもできない方」とであると証しています。（テモテ第一 6:16）詩編作者は詩編104篇を次のような賛美の言葉で始めています。

わが魂よ、主をほめたたえよ。

わが神、主よ、あなたは偉いなる方。輝きと威厳をまとおられる。主は光を衣のようにまとおられる...詩篇104篇1-2節

詩篇作者はここで天地創造の始まりについて考えさせています。聖書の中でイエスが最初に語った言葉（ヨハネによる）は、「光あれ。すると光があった」です。創世記1章2節イエスは三位一体の創造において、神の御名において選ばれた御方でした。イエスはただ一言で宇宙に「光を灯した」のです。光であるイエ

スは、無から瞬時に光を創造することができます。ですから、光は神の永遠の栄光の表現なのです。

イエスは受肉する以前、永遠の昔からこの栄光の中に生きていました。そして今、イエスは来たるべき死と復活の後、同じ光り輝く栄光の状態に戻る準備をしておられました。この経験は、十字架の苦しみの後に待ち受けているものを、ほんの少しだけ予感させるものでした。

「栄光のうちに」現れた（神によって目に見えるようにされた）ことがわかります。イエスと同様、彼らも栄光の状態で目に見えるようにされていました—二人ともまだ永遠の復活の体を待っていたにもかかわらず。

「死んだ」信者は地上の肉体を脱ぎ捨てたが、目に見えない領域では確かに生きており、最終的な復活を待ち望んでいるため、認識できる存在でもあることを示しています。イエスは後に父についてこう言われました。「父は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である！」（マタイ22:32）

モーセとエリヤは実在の人物であり、共に預言者であり、二人の人間としてイエスを訪問しました。しかし、彼らはまた、旧約聖書の律法（モーセ）と預言者（エリヤ）を象徴しています。なぜなら、二人とも旧約聖書のこの二つの主要な部分と関連していたからです。

「律法」を与えるために用いられた預言者です。エリヤは旧約聖書の「預言者」の書を一つも書きませんでした。16の預言者書に結実した「預言者運動」の指導者でした。エリヤはこれらの書の象徴であり、代表者です。

「旅立ち」（これから起こる死と復活）について長い会話を交わされました。ルカは復活後のイエスの言葉を引用しています。

「キリストはこれらの苦しみを受け、それから栄光に入るはずではなかったでしょう。そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体を通してご自身

について語られていることを彼らに説明されたのです。」ローマ人への手紙24章26-27節

きらめく白い光に包まれた孤独な山を彩る、まさに聖書に示された交わり。なんと素晴らしい光景でしょう。

イエスにとって、なんと励みになったことでしょう。変容は、十字架の言い尽くせない苦しみ後にイエスが手にするであろう栄光を思い起こさせました。モーセとエリヤはキリストの苦しみを預言した聖書の教えを知っていたので、旧約聖書に記されているイエスに関するすべての事柄に対するイエスの解釈に、他の誰にも劣らず同意することで、イエスを励ますことができたのです。

この二重の確信は、イエスにとってなおさら重要なものでした。なぜなら、イエスは弟子たちにご自身の死と復活について語り始めたばかりだったにもかかわらず、弟子たちはそれを信じようとしなかったからです。ペテロは、そのようなことを語ったイエスを叱責さえしました（マルコとマタイはこのことを記しています）。イエスは、人生における最も重要な使命であるこのことについて、地上の誰からも支えや交わりを得られませんでした。だからこそ、十字架を見つめながら、聖書にすがりつき、父なる神の御前にすべての力を見出していたのです。変容は、十字架への旅路において、イエスに慰めと確信を与える力強い出来事となりました。

変容の際、イエスを最も力づけるものがもう一つありました。それは、父なる神の御声です。洗礼の際に天から与えられた御言葉（これはイエスの宣教における死と復活の中心的役割も表していました）は、聖書におけるモーセとエリヤとの交わりのまさにクライマックスにおいて、イエスに与えられた御言葉と同じでした。

「これはわたしの愛する子、わたしの選んだ者。」

モーセ、エリヤ、そして聖書よりもはるかに偉大なものが、この貴重な瞬間にイエスを力づけました。御父は、イエスが死に至るまで従順であるからこそ、御子を愛していると、はっきりと聞こえる声で断言されました。

ヨハネ10章17節でこう言われました。 「父はわたしを愛しておられる。わたしが命を捨てても、またそれを得るからだ。 」地上の誰も十字架上で起こる神秘を完全に理解したり、受け入れたりすることはできませんでしたが、父なる神はそこですぐに何が起こるかを知っていました。そして、まさにその理由から御子を愛したのです。それで父なる神は山上でこう言われました。 「これはわたしの子である。わたしが選んだ者である。 」 愛よ、私が選んだ人よ。 」

これこそが、カルバリを永遠の奇跡たらしめているのです。十字架と復活が神にとって価値あるものと認められるからこそ、この奇跡は地上の私たちにとっても有効なのです。

これらの出来事の重大さを真に理解できるのは、父と子と聖霊だけです。だからこそ父の声は、イエスが十字架を通り抜け、その後続く栄光へと入るように励ましました。これは三位一体の永遠の計画であり、イエスは必ずそれを成し遂げなければなりませんでした。

ですから、ルカは十字架を、イエスがエルサレムで「成し遂げる」であろう「出エジプト」と形容しました。確かに、イエスは罪深い人々の手に引き渡されるでしょう。しかし、イエスは常にすべてを支配しておられます。 「ご自身の命を捨て」られるのです。誰もイエスから命を奪うことはできません。聖書に預言されているように、イエスは父なる神の永遠の救いの計画に従って命を捨てられるのです。

この観点から見ると、イエスは犠牲者ではありません。イエスは、地上を去って天国へと向かう解放と自由への途上で、自分に起こるすべてのことを完全にコントロールする勝利者なのです。

イエスは復活において「*自らの命を再び取り戻す*」のです。言い換えれば、イエスは *自ら* を死から蘇らせるのです！イエスが行う他のすべてのことと同様に、イエスの復活も父なる神と聖霊との完全な一致の中で起こりますが、それはイエス自身の意志の行使であり、イエス *自身* の成就でもあります。

これらすべて、そしてそれ以上のことが、変容のイエスに与えられたメッセージでした。イエスが父なる神からこのような励ましを受け、ゴルゴタへの残酷で血なまぐさい、苦痛に満ちた旅路を歩み通すことができたことに、感謝しませんか。私たちもまた、山上でイエスに従う際に父なる神が特別な教えを与えてくださったことに、*感謝すべき* です。

弟子たちのための父の変容のレッスン

ルカは、弟子たちがこの魅惑的な出来事のほとんどを眠りの中で過ごしていたことを記している唯一の共観福音書記者です。実際、ルカは、まるでリップ・ヴァン・ウィンクルがアメリカ独立戦争の間ずっと丸太を挽いていたかのように、深い眠りについて描写しています。なんとも気を散らされた弟子たちの姿でしょう。イエスは地上での33年間の生涯で最も輝かしい出来事の一つを経験しているのに、3人の弟子たちはそのことに全く気づいていません。そして、事態はさらに悪化するばかりです！

ついに弟子たちは目を覚まし、主の栄光が目の前で変容するのを見ました。ルカは「*彼らは完全に目が覚めて、主の栄光を見た*」と記しています。私たちも、そこで起こった出来事を通して、主の栄光に完全に目覚める必要があります。そして、*彼らが*」ルカは、*彼らがただ*」イエスの栄光のそばに立っている二人の男」を見ただけだと指摘しています。

これは、イエスがモーセやエリヤとは異なる卓越性を持っていることを示唆しています。ルカの物語の残りの部分は、この考えをさらに発展させています。

弟子たちは、モーセとエリヤがイエスと十字架と復活の聖書について議論しているのを目撃しました。これは地球史上最大の討論会であり、それを目撃したのは彼らだけでした。ここまでは順調でした。しかし、すぐに悲劇が起こります。ペテロが口を開きます。

もし耳を傾け、黙っていなければならない時があるとすれば、まさに今がその時だった。口を開くのは常に危険だが、ペテロはまさに足丸呑み寸前で、世界級の足食いだった。彼が言った言葉は、一見無邪気なように聞こえる。」先生、私たちがここにいるのは良いことです。幕屋を三つ造ろう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、そして一つはエリヤのために。「--ペテロは自分が何を言っているのか、よく理解していなかった。

ルカはペテロがここで意味不明なことをまくしたてていたと指摘しています。もし彼が自分の言っていることを本当に理解していたなら、「岩」なる神はすぐに口を閉じていたはずです。

ペテロの発言は父なる神にとってあまりにも不快なものであったため、神は即座に「栄光の雲」を出現させ、旧約聖書の幕屋を覆っていました。旧約聖書の歴史に精通していたユダヤ人であるペテロ、ヤコブ、ヨハネは、文字通り「彼が話している間に」神の臨在の雲が突然現れたため、恐怖で正気を失いそうになりました。雲は彼らの上を移動し始め、彼らは互いの視界から消え去りました。それは、見通せないほど渦巻く白い霧の中へと消えていきました。

弟子たちは、スペースシャトルの離陸時の振動のように、地面に震えていました。彼らは恐怖に震えていたのです。

これらすべては、ピーターが突飛な提案をするほんの数秒の間に起こった。雲だけでは不十分だったのか、父なる神は自らの命令口調でピーターを黙らせ、まだ話している途中で言葉を遮った。

」これは私の息子、私の愛する選ばれた者である。あなたたち(複数)は彼の言うことを聞き続けなさい。 「

の提案の何が、父なる神からこれほど即座に、そして力強い反応を引き起こすほど不快だったのでしょうか。これが、私たち弟子にとって身の毛もよだつこの出来事の核心です。父なる神は、私たちがこの言葉を聞き逃さないように、現在形の命令形の複数形を用いて私たち全員に語りかけました。

ペテロは、イエス、モーセ、エリヤそれぞれに一つずつ、三つの幕屋を建てることを提案しました。これはイエスをモーセや預言者たちと同等の立場に位置づけるものです。確かに彼らは良い仲間でした。しかし、イエスには及ばないので、父なる神は介入せざるを得ず、 「これはわたしの子だ！」と叫ばれました。

神の父性と同様に、イエス・キリストの子性は極めて唯一無二です。イエスは神の永遠の子であり、三位一体の第二位格です。父はただ一人、聖霊はただ一人、永遠の子はただ一人です。三位一体の各位格はそれぞれ独自の「神性。と呼ばれる領域に属しています「

モーセとエリヤは罪深い人間でしたが、神の恵みと力によって忠実な預言者へと変えられました。しかし、彼らは今も、そしてこれからも、人間であり続けます。イエスは今も、そしてこれからも、子なる神です。イエスは偉大な預言者でもあります、預言者以上の存在です。父なる神が永遠の神であるのと同じように、イエスは永遠の神である御子なのです。

モーセとエリヤはどれほど偉大であっても、土の上につ伏せになり、イエスのサンダルの底の土に触れるようなことは許されません。彼らはイエスの仲間ではありません...彼らは三位一体の神々ではありません！

そして父は山上の三使徒全員に、そして私たち全員にもこう言いました。 「あなた方は皆、主に聞き従い続ける必要がある！」

歴史上、神として耳を傾けるに値する人はただ一人、神の御子イエスです。この言葉は、御子イエスの唯一性と卓越性、そして生ける言葉としての役割を、父なる神が承認する証です。

実践的な観点から言えば、四福音書は弟子が学ぶべき聖書の中でも最も重要な部分です。これは、父なる神が変容の際に語られたことの重要な含意です。イエスの言葉はモーセや預言者たちの言葉に匹敵するものではありません。これらの人々は皆、天の軍勢と共に永遠にイエスを崇拝するのです。ですから、父なる神はこう言われました。 」あなた方は皆、主に聞き従い続けなければならぬい！」

万が一、私がここで大げさに言っていると思うなら、ヘブル人への手紙の第 1 章を読んでみてください。

(1.1) 神は、昔、預言者を通して父祖たちに多くの部分と多くの方法で語られた後、 (2) この終わりの日に、御子を通して私たちに語られました。神はすべてのものの相続者とされ、また彼を通して世界を創造されました。 (3) そして彼は神の栄光の輝きです。そして神の本質を正確に表現し、神の力の言葉によってすべてのものを支えています。イエスは罪を清めてから、いと高き所の大能者の右の座に着かれました。 (4) 御使いたちよりもすぐれた名を受け継がれたように、御使いたちよりもすぐれた者となりました。ヘブライ人への手紙 1 章 1-4 節

明らかに、これらの記述は、神が過去に語りかけた旧約聖書の預言者たちのうち誰にも当てはまりません。旧約聖書と新約聖書に記録されている人物と業の中で、イエス・キリストだけが人間の肉体に受肉した創造主であり、それゆえ、その言葉と業は全く別格であり、完全に神聖です。

そのため、ヘブル人への手紙の著者は、第 1 章の残りの部分で詩篇からイエスの神性を主張する一節を引用し、第 2 章の冒頭で次のように続けています。

(2:1) ですから、私たちは聞いたことに、もっと注意を払い続けなければなりません。そうしないと、そこから漂い去ってしまうでしょう。(2) なぜなら、御使いたちを通して語られた言葉は、変わることはないものであったからです。そして、すべての罪と不従順は当然の報いを受けました。

(3) これほど大きな救いを無視して、どうして逃れることができますでしょうか。それは、主によって最初に語られた後、聞いた人々によって私たちに確証されました。(4) 神もまた、しるしと不思議と、様々な奇跡と、神自身の意志による聖霊の賜物によって。

著者は、当時の弟子たちがすでに四福音書の内容から離れ始めていることを懸念しています。」「私たちは、聞いたことに、さらに一層の注意を払い続けなければなりません。」著者は私たちに、生涯を通じて「聞いたこと」に、ますます一層の注意を払うよう促しているのです。

言い換えれば、四福音書の内容は、熱心に学び、完全に習得したら次に進むといった類のものではありません。」もう行った、やった」という考え方はここでは通用しません。これは非常に重要なことであり、私たちは永遠に、より一層の注意を払い続けることをやめてはならないのです。

四福音書に記された「主によって最初に語られたこと」は、使徒たち(「聞いた人たち」)の証言を通してすべての信者に確認され、父なる神もまた、様々な奇跡と聖霊の賜物によって、彼らの証言の真実性を証しされました。

福音書に記されたイエスの生涯と言葉は聖書の中でも特異なものであるため、ヘブル人への手紙の著者は私たち全員に非常に深刻な問いを投げかけています。

「このような偉大な救いを無視したら、どうやって逃れることができるでしょうか？」唯一の答えは、「逃れられない」です。

イエスは弟子としての生き方についてこう言われました。「どうして盲人が盲人を導くことができようか。二人とも穴に落ちてしまうのではないか。」「私た

ちが」これほど偉大な救いを無視する」なら、穴に落ちることから逃れることはできません。

言い換えれば、私たちは父が私たち全員に命じたとおりにしなければなりません...」主に聞き従い続け」、そうすることをやめさせようとする多くの誘惑の餌食にならないようにしなければなりません。

友よ、ヘブル人への手紙の著者がイエスから」聞いたことに、もっとよく注意を払いなさい」と懇願し、切実に警告したこの言葉は、もし彼が今日生きていたら、命を救おうとする者にとって、まさに血も凍るような叫び声となるでしょう。私たちの多くは、イエスの言葉に耳を傾けなくなってしまったのです。

要約すると、イエス、そしてその御言葉は、あらゆるものにおいて卓越しています。これは父なる神が天から聞こえる声で語られたメッセージであり、ペテロが犯したような破滅的な誤り、すなわちイエスとその教えを他の預言者、人物、そして教えと同等の地位に押し下げる誤りを、私たちが犯さないようにするためのものです。

イエスの言葉は、弟子たちが学び従うべき、最も権威があり、重要で、不可欠な聖書の部分です。